

辻：庶民による人生の記録の創出

庶民による人生の記録の創出

－橋本義夫と初期「ふだん記」運動の場合－

辻 喜代司

The Creation of the Life Documents by Ordinary People :
From a Study on the Early Works by Yoshio Hashimoto and 'Fudangi' Circle

Kiyoshi TSUJI

はじめに

庶民の文章サークル活動として知られる「ふだん記」運動を創始した橋本義夫（1902－1985）の著述活動は、戦前にさかのぼる市民運動の歴史をもつ東京・八王子市域を舞台として、1951年に彼の自宅に「地方文化研究会」の看板が掛けられたところから出発し、運動が開始される1968年までに小冊子による「地方文化資料」を約50冊生み出した。「ふだん記」運動の原典とされる『平凡人の教育・文章』はその49番目に位置する冊子である。

本稿は、橋本の初期著作である「地方文化資料」と、「ふだん記」グループによって出版された「ふだん記本」および「ふだん記新書」（以下、両者を一括して説明する場合は「自著本」¹と表記する）の執筆者およびその作品内容を書誌的に考察することで、橋本自身の「書く実践」²の内容を検討する一方、「万人に文を書かせ、万人が本まで出せる」³ことを目標に掲げた「ふだん記」運動の本質が、庶民が自らの人生の記録を書いて出版する実践⁴とその支援にあったことを明らかにするために、運動の生成が生み出した「自著本」という成果物の内容分析をすることで、両者の働きかけと創出の協働的關係を考察するものである。

橋本の「地方文化資料」は、色川大吉氏と梶岡男氏らが中心になって編集された『沙漠に樹を 橋本義夫初期著作集』にその代表作6編が収録されているものの、これまで体系だった作品研究はなされてこなかった。「ふだん記」運動の作品紹介は、橋本自身が『だれもが書ける文章』（1978）において試み、色川氏の『ある昭和史 自分史の試み』（1975）および『自分史－その理念と試み－』（1992）にも該当箇所があるが、作品群の分類研究は未開拓のまま残されていた。その意味では、「自著本」の書名、著者、発行年、所蔵を明らかにした、小林多寿子氏の『「ふだん記」運動の展開過程と戦後のリテラシーの変容に関する実証的研究』（2005）の『「ふだん記」資料編』は作品研究の基盤形成を行ったものと言える。

本稿では、「地方文化資料」と、「ふだん記」運動が生み出した、庶民の自費出版による「自著本」の内容分析に踏み込んで、その特色を明らかにすることを試み、両者の連続性および関係性について考察を行う。

なお、色川氏は前掲書において、「『自分史』という用語は私が初めて使用したとしても、実質的な『自分史の運動』は橋本がはじめたものと思っている。」⁵と述べて、「自分史」概念の由来が「ふだん記」にあったことを言明している。筆者はそれを踏まえつつ、特に初期「ふ

だん記」運動⁶において創出された庶民の「人生報告書」⁷がどのような特色を備えていたのかについても考察したい。

1 橋本義夫の「地方文化資料」

1-1 資料の概要

『沙漠に樹を 橋本義夫初期著作集』(1985)は「地方文化資料」の代表的冊子を収録したもので、橋本義夫の思想や実践を研究するうえで欠かせない資料である⁸。この「地方文化資料」の全体像については梶氏が、①30頁前後の「パンフレット」と呼ばれる小冊子で、謄写印刷とタイプ印刷のものがある。②1951年から1960年までのおよそ10年間に約50冊が発行された。③発行にあたって「多摩文庫刊行会・多摩文化研究会・持田次郎・斎藤良平・松岡喬一・清水成夫・沼謙吉さんらの支援」が存在した。④それらには、八王子地方で戦前から教育・文化活動に携わった教員・教育関係者、農民、職人、芸術家などを紹介した地方人物誌が多数含まれている、という点を明らかにしている⁹。筆者はこれに以下の各点を追加、指摘したい。まず、発行部数については、資料に残された記録等を勘案すると各号100部を基準としていたと考えられるものの、30部や50部、あるいは80部に限定されたものや、300部とされるものを含んでいる。また、後出する「産業人物誌稿」は1965年に発行されていることから、「地方文化研究会」を拠点とした出版活動は、1968年に「ふだん記」運動が開始される時期まで継続されていたことも指摘できる。なお、この期間における橋本の出版形態に関する考え方も付け加えておきたい。彼は「今の出版は、商業出版、自費出版、官庁出版の三種がある。我はこれに『協同出版』を加えたい。みんなで書き、出し、読むと云ふ方式である。」¹⁰と述べて、自らの地方出版に新機軸を打ち出す構想を実践に結びつけた。

今回調査を行ったのは、橋本鋼二氏宅付設の「橋本義夫記念資料庫」と八王子中央図書館に保存されている資料であるが、資料名が「地方文化資料」(後期のものは「地方文化研究資料」)「地方史学史資料」「古文書編集復刻」「多摩文庫」「多摩芸能史資料」「産業人物誌稿」などと多岐にわたり、それらに付けられた号数から推測すると、橋本以外の著者によって執筆された冊子が相当数存在することがわかる。本稿では、橋本自身の「書く実践」と「ふだん記」運動との連続を考察するために、上記資料庫および図書館に所蔵される、橋本自身が執筆または編集に直接関わった資料に限定して考察を行いたい。従って、本稿で論考の対象にしているのは、「地方文化研究会」を発行所として刊行された、橋本の執筆による「地方文化(研究)資料」を中心とする出版物ということになる。

これらを内容的に大別すると、「地方人物誌」「地方教育論」「地方文化・地方史研究および古文書復刻」に分類できるのではないかと筆者は考える。この試案に沿って橋本の著作を分類すると次のようになる。

まず「地方人物誌」に分類される資料としては、『平井鉄太郎』(1954)、*『村の母―家庭主婦の生涯―』(1954)、『藤田俊一先生―丘陵に種蒔く教育者―』(1955)、『岡村保雄―社会運動の忠実な無名戦士―』(1958)、『メイラン神父―八王子の聖者―』(1959)、『メイラン神父―八王子に於ける言行―』(1959)、『大伝道者メイラン』(1959)、*『小さな実験―監禁の記録―』

辻：庶民による人生の記録の創出

(1959)、*『洞水 生涯と作品 思い出』(1959)、*『明治の末一少年の思ひ出』(1959)、*『伽羅の木のある家―農家の歴史―』(1959)、*『林副重―多摩の政治家―』(1960)、『先覚者 小林浅洲』(1961)、『村田光彦』(1961)、*『橋本喜市のこと』(1961)、『鯉の吉田定一』(1965)、『名校長 森耕一』(1965)、『忘れ得ぬ人 中丸光流』(1965)をあげることができる。
(*印は橋本の自伝的記述との関連が強いもの)

次に「地方教育論」には、『農村の学校―陶鎔学校七十五年―』(1952)、『大正時代の八王子の教育運動―薫心会―』(1958)、『地方の教育運動―昭和戦前の八王子と周辺―』(1959)、『天才―埋もらせないために―』(1960)、『苗床型教育―地域に於る教育計画―』(1960)、『平凡人の教育・文章』(1960)を分類した。

「地方文化・地方史研究および古文書復刻」という区分は暫定的なもので、資料的な位置づけの難しいものが含まれており、今後の検討を必要とする。現時点では以下の資料を配置した。
『土地の性格―八王子地方―』(1955)、『一都市の性格形成者―イミテーション産業其他―』(1955)、「大久保長安―信玄の技術を生かした人物―」(『大久保長安 日本近世初期開発の大先覚者』(1956)所収)、『幻境 (北村透谷記念文集)』(1956)、『由木案内―丘への招待―』(1957)、『「横山根元記」の正体―八王子研究最大の障害物―』(1959)、『農家の年中行事―東京・多摩地方 明治末期から大正頃―』(1959)、『天然理心流』(1959)、『地方と芸能』(1959)、『江戸時代の川口村』(1959)、『沙漠に樹を―戦後地方文化運動記録―』(1960)、『丘の雑木 地方文化運動記録 (二)』(1960)、『古代中世 地方史研究法稿―未知は誘惑する―』(1960)〔以下は古文書復刻〕『夢波^{たは}の土産―江戸時代の多摩旅日記―』(1955)、『村の古文書 1―東京都南多摩郡川口村植原―』(1955)、『常民の論語―近世末期頃に於ける教訓集―』(発行年不明)、『横山根元記』(1959)

1-2 資料の内容分析

前節で分類を試みた「地方文化資料」のうち、「地方人物誌」に相当する資料には*印で示した一つの流れがある。それは橋本の生い立ちとその家庭の様子が、明治末期から大正・昭和という時代背景の中で、両親や「洞水」「副重」という近親者の生活描写を通して描かれていることである。この手法による著作は『村の母』や『橋本喜市のこと』などに分冊化されている。また、『伽羅の木のある家』のように、1945年の八王子空襲で焼失した生家の様子をまず詳細に描き、そこでの家族の暮らしや、訪れた人々の様子、および焼失を免れた古文書を通して知りうる先祖のことなどに言及することで、家にまつわる物語を構成したものもある。さらに、『小さな実験』は、敗戦前に治安維持法違反の嫌疑で留置された経験を記したもので、戦前に書籍商という一市民の立場から教科研運動に関わり身柄を拘束された経験を、一つの「実験」として捉え描写したものである。

「地方人物誌」が平井鉄太郎を初めとする教育者の実践に強い眼差しを向けていることも特徴としてあげられる。平井は橋本と親交のあった小学校長で、「昭和の初年から戦争に反対していた」¹⁴カトリック信者でもあった。平井の業績と八王子空襲で焼失した彼の膨大な蔵書を惜しんで建立された「図書塚」の発起人は橋本であり、この時期の「地方文化資料」が、彼の

「建碑運動」¹²と不可分の関係にあることも見落とせない。

「地方人物誌」におけるこうした顕彰意識は、メイラン神父の業績にたいして最も明確な形で発揮された。橋本は教会信者ではなかったが、戦前からメイラン神父（八王子カトリック教会）の活動には宗教活動の枠を越えた社会教育的営為を見出していた。その死後「この地で本当の仕事をやったのは、フランス人メイラン神父だけであろう。四十数年間の献身は超人的であった。この異邦人につぐ人はいないようだ。」¹³として、関係者に呼びかけ完成させたのが「メイラン三集」と呼ばれる資料集である。岡本保雄もその奉仕活動に触れて「私は子供の時メイラン神父の供をして、色々の病人の家に行った。」¹⁴と振り返っている。

橋本は同時期に地方新聞に約二千二百編にのぼる膨大な投稿をおこなっているが、「人物誌」との関連において、この中に含まれる短編の人物伝については言及しておく必要があるであろう。このうちおよそ75編が、1959年から「多摩文化研究会」を主宰していた鈴木龍二の編集によって『雲の碑 地方の人びと』（Ⅰ・Ⅱ集）に収録された。筆者の分析によると、その人物発掘に共通するのは、①明治期以降、三多摩地方にゆかりがあり、②政治家から市井の人に至る職業人で、③男女を問わず、④善人であるがために、かえって他者のために身を犠牲にしたような経歴の持ち主、に視線が向けられていることである。表現手法では、特に「奇人・変人・凡人」に対する偏見を逆手に取って、彼らに対する価値観を逆転させ、顕彰につなげようとした点に明らかな共通性がある¹⁵。

さて、「地方文化・地方史研究」では、従来の「郷土史」および「郷土史家」の言説を根本的に批判する視点を提示している。橋本は自分の生まれ育った風土を、地理的歴史的に分析することで、そこに成立した産業を「イミテーション産業」と規定し、その経済活動を背景とする教育観が、人を育てる観点をもたない浅薄なもので、文化的に不毛の地を生み出していると、痛烈な批判を展開した。これは戦後復興による経済活動優先の社会情勢の中で、橋本の「建碑活動」が地域において理解されず、地方ボスや親族から執拗な妨害や反対を受けた経験を背景とするもので、その痛恨の総括が「戦後地方文化運動記録」である。橋本はまた、「郷土史」という表現を嫌い「地方史」を用いたが、それは「地方史などは、地方の現状、性癖、欠陥を知り、明日を知るための目的であって、云わば医学に似たようなものである。ところで現状は、自慢話、趣味道楽でしかないようだ。これは厳しく批判されなければならない。」¹⁶という主張に基づくものであった。この主張を踏まえて、地方史研究の方法論を示したものが『古代中世地方史研究法稿—未知は誘惑する—』であると言えるだろう。橋本は戦後始めた地方史研究で、村田光彦を初めとする「地方史家」と親交を結び、その見解を支持し自らの出版物で公表する姿勢を貫いた。「大久保長安」や「横山根元記」に関する冊子はこの活動の中から生まれている。

1-3 「ふだん記」運動との接続

前節で内容分析を留保していた橋本の「地方教育論」は、戦前の橋本自身の青年運動¹⁷および教科研活動への参画¹⁸を記録したものと、戦後の「地方文化活動」の経験を踏まえた青年教育への提言に大別される。後者で盛んに論じられているのは、青少年の才能と適性を見抜きそ

れを育てるだけの教育的環境が地域にないのであれば、「苗床」のように、そこから別の場所に移植して育てる必要があるという点である。そうでなければ、才能をもった青少年は地域に埋もれ果ててしまうという。位置づけから言えば『平凡人の教育・文章』はこの後者の分類に含まれる。同書は「ふだん記」運動の原典とされているが、もともとは別冊であったものが合本化されているために、「教育」の論旨と「文章」論との関連は薄い。前者は明らかに「苗床型教育」論の延長線上にあるもので、工業技術教育の推進を軸にして、日本から「世界市民」を生み出していくべきだという提言であって、文章論への接続を構想しているわけではない。あえて言えば、橋本が昭和初期に世界共通語に関心をもち、「ようらん社」内に当時の日本エスペラント学会の支部を置いていたことを想起させる¹⁹。

これに対して『平凡人の文章』の方は、橋本が1958年から5人の女性に「すゝめて、書かせ、（地方紙などの発表機関に）出し、切抜を配る」（括弧内は筆者による補足）²⁰ことをおよそ10年にわたって続けた「ふだんぎの会」²¹の実践に基づいた文章論である。橋本の言う「ふだんぎ」（後の「ふだん記」）とは、よそいきでないふだん着の生活観による庶民の文章作法である。彼はこの著で、文章の多寡による「中央」と「地方」の文化格差を問題にしている。「国漢文の教師」を比喻に用いて、書くことを庶民から遠ざけてきた「文章貴族」とその「美文」「名文」に批判を集中させているのはそのためである。彼はまず「万人の文」があってよいと説く。その念頭に置かれているのは、法然や親鸞・蓮如が庶民のために書き残した「平易な文章」で、特に「手紙」の優先順位が高い。それは、「正直」に書かれた「事実を記録」するための文で、そこでは「どう書くか」ではなく「何を書くか」が問題とされるのだという。橋本はここで「万人の文」の塑像を描いて見せたのである。しかし彼はこの冊子を知り合いに配布した時、「全然、お礼も来なければ感想を述べる人もいなかった。」²²と等閑視された経験も語っている。これが「ふだん記」運動で『みんなの文章』として増補復刻されるまでにはさらに8年の歳月を要したのである。

2 「ふだん記」運動が創出した「自著本」

2-1 「自著本」の概要

「ふだん記」運動は、橋本の四宮さつき、大野弘子らとの出会いを契機として、1968年の機関誌『ふだんぎ』の発行によって、八王子市内の文章サークル活動として開始された²³。この運動が創出した「個人文集」と呼ばれる自費出版本は、A 5 版の「ふだん記本」に始まり、「薄くて簡単に作れる小型の本」²⁴をめざして1974年に創始されたB 5 版の「ふだん記新書」に大別される。その多くは、隔月で発行される機関誌『ふだんぎ』への投稿をきっかけにして、橋本から本にするように働きかけを受けた会員の人生の記録である。橋本は「ふだん記」運動を社会的「実験」だと公言していたが、これは彼が人の一生を「時代」と「場所」によって与えられた空間における、人それぞれの「生き方」による「実験」とみなしていたことにつながる。その記録が彼の言う「人生報告書」²⁵である。

「ふだん記」運動は、当初から会員に一人一冊の著書をもたせることをめざしていたので、「自著本」の刊行は運動の開始とともに始まっているが、内容的には橋本の著作の復刻と「ふ

だん記文集」²⁶の出版が中心で、「個人文集」として出版されたのは1968年の『平井マリ文集』が最初である。次に続くのが1969年の『道はるかなれど』（高野清子）、1970年の『多摩の丘かげ』（小泉栄一）と『ジョンと思ひ出の浅草』（川畑秀子）というように年間2～3冊の時期を経て、その刊行が本格化するのは1971年に入ってからである。

本稿は、東京都八王子市で機関誌『ふだんぎ』の創刊とともに橋本が運動を開始した1968年から、「全国グループ」から独立する形で、足立原美枝子によって神奈川県愛甲郡八菅に地方グループが発足する1977年までの、初期「ふだん記」運動の10年間に刊行された「自著本」について書誌的な分析を行い、運動の特色をその成果物から明らかにする試みを行なう。この時期は、橋本が自らの運動を振り返って「実験十年」²⁷とした期間に相当し、さまざまな分野から参加した会員が、多様な形態と内容をもつ「自著本」を出版するなかで、「ふだん記」の理念が実践的に験された、運動の形成過程とも符合する。

この間、どのような人々が「ふだん記」運動に参加して自費出版を行ったのかを把握するために、上記期間に刊行された「ふだん記本」（別表1）および「ふだん記新書」（別表2）の書名および著者の属性に関するリストを作成した。ここからは上記別表に沿って分析を進めたい。

2-2 初期「ふだん記」運動に参加した人々

本節で調査の対象にしたのは、1968年から1977年の10年間に「ふだん記全国グループ」から「自著本」を出版した、橋本を除く71氏による85作品で、14氏がこの期間に二著を出版している。男女比は男性33名に対して女性38名である。これは、小林氏が1968年から1970年までに発行された機関誌『ふだんぎ』（1～17号）の投稿者（男性273名、女性399名）について分析した「女性率」の平均値（59.4）²⁸よりも男性比率が高まる（「女性率」53.5）。すなわち、機関誌への投稿者の男女比と、「自著本」執筆者の男女比に関しては、女性の方が多いことは事実であるが、相当数の男性が参加する運動形態であったことがわかる。

年齢に関して生年をみると、明治生まれが28名、大正生まれが28名、昭和生まれが14名（不明2）で、執筆時の年齢は90代1名、80代2名、70代9名、60代24名、50代15名、40代11名、30代5名、故人3名（不明2）であった。これは、執筆者の多くが明治から大正を経て昭和にいたる激動の時代を生き抜いた経験を共有し、特に家庭生活や職業形成が、「15年戦争」と呼ばれた太平洋戦争の戦前、戦中、戦後における国家統制期や戦災期、混乱期によって、長期にわたる深刻な被害を被らざるを得なかったことを示している。また、その経験の報告者が、60代を中心に、上は90代から、戦後生活を中心とする30代にまで及ぶ、世代的な連環を形成していることも特徴としてあげられる。「ふだん記」運動は高齢者の生き甲斐と結びつけて論じられる場合があるが、それを構成する人々の年齢は、老いも若きもと形容できるほど多様である。

その多様性は学歴についても指摘できる。女性についてみていくと、学校階梯から女性が疎外されていた時代背景から、小学校卒（高等科、高等小学校、裁縫学校を含む）が12名、青年学校・中学校（新制）・高校（同）が4名（不明1）と多数を占めるものの、その他の卒業校は大学・専門学校（5名）、師範学校（3名）、短期大学（1名）、高等女学校（8名）、実業学校および養成所（4名）と広範囲であるために一概に学歴が低いとはいえない。むしろ女性とし

ては高学歴者の多いことを指摘した方が妥当と言えるであろう。この傾向は男性についても同様で、大学・専門学校9名、師範学校1名、実業学校・養成校9名、高等科を含む小学校9名、青年学校、中学校（新制）2名（不明3）という内訳になる。学歴に恵まれなかった人々の比率は高いが、教育関係者を中心に、高学歴者を含む構成になっている。

学歴につながる職歴については、太平洋戦争をまたいで戦前と戦後でその様相が異なるために記述が困難であるが、従事した期間の長さを基準にすると、女性では主婦業を主とする履歴が圧倒的に多く36名を数える。その多くは兼業主婦で、農業従事者、看護婦、職人、教員、会社員などの職歴をもつ。男性では、会社員13名が最も多く、この中には会社経営に関わる4名が含まれている。教員がこれに次いで6名である。その他、公務員3名、農業2名、農協・福祉施設職員2名、職人2名、商人2名、僧侶1名、自営1名、学生1名と多岐にわたる。

橋本は「生きた社会の記録としては、各種の人々の層の厚さと面の広さが必要である。」²⁹と述べて、俗に言う社会的地位が高い人の運動への参加を拒みはしなかったものの、次節で引用するように、「無名人」の仕事こそが「ふだん記」運動の本質であるとして、是々非々で対応した。

2-3 「自著本」の内容分析

「ふだん記」運動の「自著本」はその表現様式においても一様ではない。二表でもわかるように詩集や創作童話、エッセーがあり、時間を隔てた遺稿集も含まれている。橋本は「ふだんぎは詩でも短歌でも俳句でも何でもよい。新しい独創的なことに挑戦するのは猶よいし上手でも下手でもよい。万人が書くことに意義がある。」³⁰と述べる一方、「無名人人間のことを、無名人人間が、無名人の言葉で書くのが私達の仕事であり、これが『ふだん記』である」³¹として、「ふだん記」の方法によって「人生報告書」を書くことを提唱した。

橋本がその具体的事例として紹介しているのは、吉成ウメ『八十歳をこえて』（1973）、横山利雄『流々転々』（1977）、金沢志奈『久慈川上流』（1971）、伊東光江『幻の樺太』（1972）、白鳥謹爾『こどもと共に』（1972）、山本秀順『道とあしあと』（1974）、清水豊『身辺今昔』（1975）、三瓶康子『球子自伝』（1975）、柳川ぎん『農婦のペン』（1976）、豊田タカ『居候日記』（1976）、沢田鶴吉『寺田の百姓』（1975）、尾股惣司『ある鳶職の記録』（1972）、小金井巽『小ちゃん八百屋』（1975）、西村サキ『沖永良部島』（1975）などの作品群である³²。

橋本是个々の「人生報告書」には固有の価値があり、巧拙を問わず優劣はつけられないという批評の立場を明らかにしていたので、これらの作品は「ふだん記」における代表性を示しているものだと考えられる。例えば、82歳という高齢で農婦としての人生を振り返った吉成の場合は、明治末期に東北地方で見聞された「人売り」の訪問についての記述が紹介されていて、その評言では、人生の記録はその気になりさえすればいつでも、どこでも書けること、長い経験は記録すれば貴重な価値をもつことが指摘されている。

四国生まれの横山は、高等小学校を終えてから「17職」を渡り歩いた「天性の拙速主義、流々転々の」³³人生を淡々とした筆致で描ききった人である。橋本はその「正直さ」を「比類なき『人生実験報告書』である」と評価した。

伊東のふるさととは敗戦によって祖国から消え去った樺太の豊原市である。彼女の青春はそこからの引き揚げや学徒動員とともにあった。橋本はその時代背景を「若い日に燃焼するにはあまりにも酸素の供給の少ない時代」と表現している。ここで着目されているのは、後述する金沢のそれとも共通する「女性史」の側面である。橋本はさらに三瓶、柳川、豊田に代表される「婦人の記録」のもつ「土から掘り出したような」力に触れて、そこから新しい「国民文学」が生まれるかも知れないと述べている。三人に共通するのは太平洋戦争が夫婦や家族にもたらした災禍である。六十数才で初めてペンを取った柳川は、昭和17年からの応召によって、農家を維持していた義弟三人と夫を次々と奪われ、夫と義弟一人が戦病死する中で四人の子供を育てた経験を中心に、戦後のフィリピン墓参も記録した。作品では触れられていないが、豊田の夫は航空隊配属後に罹患し、十数年の闘病生活後早世している。青年期に独立を求めて沖縄を飛びだした三瓶の場合は、出征させた長男を失い、東京空襲からの混乱期に警察署長の激務に耐えた夫と家族を支えた。三瓶は70歳の時に労苦をとともにした夫を失い、「せめて生きて来た証しを活字にして、子や孫の心に止め置き度いと思って居た。」³⁴と執筆の動機を語っている。

また、「離れ小島の生活記録」として紹介されている西村サキの『沖之永良部島』にも「戦争の爪あと」が克明に記されている。彼女の夫は結婚翌年の昭和13年に入営した。夫は復員後本土の病院に入院、この間奄美群島がアメリカ軍政下に入り、8年に及ぶ分離期間中に彼女は離婚を余儀なくされた。「それは一ヶ月や、二ヶ月ではない。一年や二年でもない。夫の出征時に妊った子供が生れて、その子が小学校に上っても、まだ帰って来ない。それは自分のために金儲けに行くでもなく、又技術を身につけるでもなく、たゞ『国家のため』ならばと、銃を取り、剣を持ち、爆弾をかゝえて、人を殺し、又自分をも殺されに行く。」³⁵と西村は書いている。

一方、彼女の「生活記録」は、「汗の記録」「実行の記録」³⁶としての代表性を示すものでもある。橋本によると、西村は小金井による『小っちゃな八百屋』の新聞紹介記事を読んで「共感」し、「ふだん記」同人になったという³⁷。小金井は野菜の商いに触れて「こうして小さい商人をやめさせる方向にもっていくのが今の政府のやり方のように思える。」³⁸と述べるなど、職業によって切り盛りされる庶民生活の実感を表現した人だが、その本領は、昭和二十二、三年頃の少年時代の家庭や学校での出来事を、包み隠さず描き出す明朗な筆致において発揮された。

職業・職人譚と言えるのは尾股、沢田と白鳥の作品であろう。尾股の作品は、聾者で『つん留』と呼ばれた少年を、一人前の職人に育てあげた親方の話を通して、鳶職人の世界を描きだしたところに特色がある。沢田は、田畑で鋤、鍬とともにあった「百姓」の感覚を文章で蘇らせた。その前半は囲炉裏を囲んだ少年時代の人々のことを語ったものである。白鳥のものは、「ふだん記」運動に底流する教育への関心と、そのことによって多くの教育関係者の参画を生んできた背景を代弁するものと思われる。橋本は何れの場合も、子供との真摯な関わりにおいてそれを評価した。

なお、自著本には、同一作者による複数著書の出版の他に、嫁と姑（大野弘子と大野あい志）や夫婦（清水豊と清水ちよ）がそれぞれの作品を出版するなどの事例があった。

3 「自分史」と、「ふだん記」における「微視の史学」

「自分史」という概念を定着させた色川氏は、初期「ふだん記」運動の代表作の筆頭に、金沢志奈の『久慈川上流』（1971）を取り上げた³⁹。橋本も東北地方農村部における「女性史」の側面から彼女の作品をみていたことは前述したとおりである。彼女は親同士の決めた縁談で福島県の酒造家に嫁ぎ、戦後の混乱期に早世した夫に代わって家業を維持しながら六人の子供を育てあげた人である。作品では、封建的家長として酒造家に君臨する舅と家族の関係の中で、そのくびきから逃れようとしてもがく自分との格闘の様子が、生活描写と心理描写の両様で描かれている。彼女が、「ふだん記」同人であった娘に勧められて、自分の人生を書き始めたのは66歳の時であった。彼女はそれを「生涯に唯一度の文章」と呼び、「悔なきものに」するために、「出来る限り嘘のない隠し立て無い文章で、真実に近い文章にしたいと思います。」⁴⁰と誓った。「自分史」を「一人々々の庶民の切実な自己認識の記録」⁴¹と規定していた色川氏にしてみれば、家を守る仕事を終えた金沢において、明確に認識された自己の存在とその表現方法が最も印象的であったことは想像に難くない。

しかし筆者は、初期「ふだん記」運動における「自著本」の中で、「自分史」の概念に非常に近接している書として、織戸健造『石ころの履歴書』（1976）をあげたい。それは色川氏の「自分というものを主体的に責任を持って前に押し出して、歴史とどう切り結んだか、また、切り結ばれたかを書いていく」⁴²という方法論にも沿っていると考えられるからである。織戸は1905（明38）年の大阪生まれで、夜間商業学校を卒業後、「糸鉤裏地洋服付属品商」を父から継いだ人である。彼は「十五年戦争」を次のように書いている。

零細な小商人の商売すらも、時局下不要不急のものとして出来なくなったというのは当時、昭和十二年に交付された次ぎのような繊維関係法令の名称を見ただけでも言える。すなわち綿製品等スフ混用規則公布、翌十三年には内地向け綿製品の製造、加工、販売制限等規則公布、綿糸配給統制規則公布、町の外科医から手術、外科治療の包帯すらも手に入らなくなったという嘆きの声も出る、そんな国民の日常生活の必需物資、衣食住用の物資はあげて、徐々に「軍需」「戦争」の方にいろいろな統制、禁止制限等の次ぎ次ぎに出る法令の下に吸い上げられ注ぎ込まれる（後略）⁴³

織戸は昭和14年の「人を物に置き替えた『物』としての人しかない」⁴⁴「国民徴用令」の下で、昼間は細々と商売を続けながら、夜間の職業補導講習会で旋盤工になるための訓練を受けるが、それは実習設備の極めて貧弱な委託指導でしかなかった。このために彼には雇用時の失敗談が多々あり「腋の下に冷や汗をかいた話」もその一つである。しかし、彼は決して自分の選択を悔やまず、むしろ「職工の生活は小商人と違って職住分離であり（中略）家に帰れば、スッと自分自身にかえることが出来る」⁴⁵と述懐している。アララギ派の作歌指導を受けられたからである。彼は家庭人であったために、戦前の左翼運動で「自己完成」を果たし得なかったが、家を捨てることによってそれを果たした人々は「運動の底辺にあって顧みられない、無名の大勢の人々の中にも存在していた。」⁴⁶として「田中和雄」の人物伝もおこした。

こうした一連の著述には明確な視点が存在する。それは、彼がライフワークとしていた「織戸」姓の研究によって培われたものであろう。彼の引用を参照すれば、その視線は「微視の史

学」から発せられたものである。即ち「歴史はこれを巨視して一国史または世界史において史論することができるし、これを微視して伝記すなわち諸個人にとって偶然としか見えないような因縁の網の目において、描き出すこともできる。微視の視角はいよいよ微を拡大しなければやまぬように、その伝記それじたいが、考えてみればわたしども自身の伝記とつながっているのである。一個人の伝記というものはありえない。」⁴⁷と。これこそまさしく「ふだん記」における「自分史」の姿を言い当てているのではないだろうか。

4 「地方文化資料」と「自著本」に共通する「自分と家族の物語」

「ふだん記」がその多様性にこそ自らの価値を見出してきた経緯からすれば、以上のような「地方文化資料」および「自著本」の作品分析を通して、両者を結ぶ概念を抽出することは難しい課題である。しかし両者に通底するものは間違いなく存在するように思われる。

「地方文化資料」の内容分析では、数多くの「地方人物誌」の存在が確認された。そのうち橋本の自伝的色彩の強い作品では、明治末期から大正、昭和初期を時代背景として、両親やその近親者の生活描写を通して自らの姿が語られていることは既に述べた。この手法は、橋本が「ふだん記」運動において提唱した自らの人生の記録、即ち「人生報告書」の作成とも深く関わる手法の一つである。

橋本の『村の母』を例にとると、彼は「地方文化資料」の最も早い時期に、「家庭主婦の生涯」として母春子の一生を描いたが、「村の母」の姿に迫ることはできなかった。「村の母」というのは、「多くの人々の世話にいがしく、子供たちまでまわりかね、『賢母』を失格してしまった人」⁴⁸で、橋本の言によるとそのために近親者からは「嘘つき」とか「しみったれ」と陰口をたたかれていた。彼はその後、この母の真実に迫る努力を続け、12年後の1966年に、ついにその姿を自らの作品の中に捉えることができた。彼はそれについて『「賢母」だったらこんな母を書く気はない。報いられるからだ。『損母』の手向けの小冊子」⁴⁹だと言っている。それが「地方文化研究会」活動の終わりがけに「文化サロン双書」として出版された『村の母—橋本春子のこと』である。このことでもわかるように、橋本の「地方文化資料」を通した「書く実践」とは、大野聖二氏のいう「平凡人というより、社会に貢献したのに評価されなかった人たち」⁵⁰を発掘して、記録に残す実践であったと言えるであろう。

さて、このような記録の中に橋本の姿がたびたび投影されていることにも注目しなければならない。橋本には自らの青年期を語った著作がないが「母は干渉せずいつも保護者であった。例えば当時は異端であったキリスト教だろうが、異思想だった社会主義であっても決して干渉せずいつも微笑しながら保護者になってくれた。」⁵¹などの記述を通して、われわれは橋本の母との関係だけでなく、彼の青年期の姿を知ることができる。つまり、家庭生活における家族との関係性の中に自己が語られているのである。

これは、執筆者とその家族のおかれていた時代背景や家庭状況は、個々に異なっているものの、橋本が主宰する「ふだん記」グループの活動を両車輪で支え続けた四宮さつき（『なぐれの中に』1971）や大野弘子（『丘の中の町にて』1972）、五島列島の漁師の妻として運動に参加した海端俊子（詩集『海は私の絵本』1974）、最初の「ふだん記」地方グループを主宰した

足立原美枝子（『相州八菅山』1974）などによって連綿と受け継がれている手法である。

橋本が「ふだん記」の文章紹介で取り上げた人々の作品も含めて、これらに共通するのは、学問領域としての「家族史」の範疇を越えた、自分とその家族の物語である。「ふだん記」には確かに、日記資料に基づいて自己の記録を詳細に記述した田村富之進の『私の履歴書』（1971）のような作品も存在するが、その多くは家族関係の中に自己を描写したものである。そして、執筆者の生き抜いた時代背景の厳しさによって、そこには個々の人生における最も痛切な喪失体験が語られているのは事実であるが、その本質は、喪失による「喪の仕事」⁵²にあるのではない。むしろ、その無念さを正直に綴ることが、庶民の人生のもつ知を涌出させる仕事になっている。「自著本」の多くは、そうした知の伝承をめざしているように思われる。

おわりに

本稿では、第一章を橋本の「地方文化資料」の検討に、第二章を「ふだん記」運動の「自著本」の検討にあて、主に第三章以下で両者の関係を考察した。

今回の「地方文化資料」に関する調査では、その全体像を明らかにすることはできなかったが、それが橋本の著作の主要部を構成して、彼の「書く実践」の骨格を形成していることが確認できた。そしてそれは、当初から出版する実践と結びついたものであった。その実践を「文章論」として方法論的に提示したものが『平凡人の文章』ではあるものの、そこにはすでに10年におよぶ彼の「ふだんぎの会」での実践活動が存在した。つまり、「書く実践」と並行して、既に「書く実践」を支援する実験的な試みが開始されていたのである。もちろん、文の蓄積の多寡が文化格差であることを見抜いて、庶民の「書く実践」をいかに支援するのかを実験的に示した彼の文章論が、単なる理論でないことは、『村の母』や『伽羅の木のある家』を初めとする彼の「地方人物誌」によってもわかる。それらは彼自身の「ふだんぎ」の方法に基づいて書かれた文章モデルとも解釈できる。また筆者は、「地方文化資料」の出版形態に関して、初期の段階から「協同出版」という考え方が示されていることにも注目した。このようにして、橋本の「書く実践」は、「書く実践」の支援を内包しながら、出版する実践との結合を深めつつ「ふだん記」運動に接続されたと筆者は考えるのである。

第二章では、筆者が作成した「自著本」の一覧表に基づき、著者の略歴等も考慮に入れながら、それらの内容分析を行った。「ふだん記本」シリーズは、橋本の『みんなの文章』を初巻に収録している。これは「地方文化資料」の『平凡人の文章』が、増補復刻されて同人に示されたものである。「ふだん記」運動で橋本が提唱したのは、「みんなの文章」を使って「人生報告書」を書くことだと言える。庶民の人生の記録を残すことを自らの使命と考えていた橋本は、この運動を「無名人による、無名人のための」文章活動であるとした。筆者はこの提唱にどのような人々が応えたのかを分析した。彼らは主に、封建遺制が生活を支配する抑圧的な社会構造の底辺で、青年期や家庭人、職業人としての自由を侵された人々である。彼らに共通するのは「十五年戦争」によってもたらされた夥しい喪失の体験である。

筆者は、第三章をおこして、これらの体験を記録した執筆者の視座の一つを「微視の史学」として紹介した。終章では「地方文化資料」と「自著本」には、喪失の体験を踏まえた自分と

家族の物語という共通項が存在することを指摘した上で、それが庶民の人生における知の伝承をめざしているとした。これが結論になりうるかと考える。

なお本稿では、その分析概念が遡及的に「資料」のもつ独自性を損なうことを恐れて、「ライフヒストリー」および「ライフストーリー」という語の使用を控えたが、これらとの関連を深める課題が残されている。

註

- 1 織戸健造『石ころの履歴書』（ふだん記新書）における用語。「ふだん記」グループ内では「個人文集」という呼び方が一般的である。
- 2 小林多寿子「書く実践と書く共同体の生成—初期「ふだん記」運動の場合—」日本生活学会『生活学論叢』3号、1998、59頁。
- 3 橋本義夫『詩集 雲の碑』（ふだん記新書）、ふだん記全国グループ、1976、77頁。
- 4 橋本は、庶民の「書く実践」を引き出すための働きかけを示す目的で「万人に文章を書かせよう」（『だれもが書ける文章』11頁）などの表現を使用した。なお、橋本は運動の指導者であるが、「小使い」や「世話人」を自称していたことでも明らかのように、その立場は今日の生涯学習における「支援者」に近似するものである。
- 5 色川大吉『自分史—その理念と試み—』講談社、1992年、17頁。
- 6 小林氏は本文に表記した論文において、「ふだん記」運動の区分をⅠ期（1968—1976）Ⅱ期（1977—1985）Ⅲ期（1986—現在）としている。Ⅰ期とⅡ期の区分は地方支部が誕生した1977年によるものであり、色川氏の区分を踏まえているが、本稿では同年に出版されたものを含めて「初期『ふだん記』運動」における「自著本」とした。
- 7 「人生報告書」については本稿第二章を参照。
- 8 「地方文化資料」として収録されているのは『沙漠に樹を』『天才』『古代中世地方史研究法稿』『みんなの文章』『地方の教育運動』『小さな実験』の6編である。
- 9 梶岡男『土の巨人—考古学を拓いた人たち—』たましん地域文化財団、1996、239頁。
- 10 地方文化研究会『通信 地方文化』第1号、1955。
- 11 色川大吉「橋本義夫の生涯とその業績」（講演）ふだん記旭川グループ『橋本義夫と「ふだん記」運動』2003、34頁。
- 12 増沢航『記録の戦後史』（ふだん記創書、2007）によれば、橋本は地方先覚者の業績を顕彰するために1951年から1957年にいたる7年間に15基の石碑を建立した。
- 13 橋本義夫『丘の雑木 地方文化運動記録（二）』（地方文化研究資料）1960、41頁。
- 14 岡村保雄『東京貧乏物語』（ふだん記新書）1976、63頁。
- 15 参考のために、『雲の碑 地方の人びと』に収録された、橋本の人物伝を紹介する（括弧内に、職業および記事発表年）。坂本登名蔵（村長、1953）林丈太郎（農民・陸稲品種改良、1954）山口重兵衛（地方政治家、1954）市川英作（学園経営・薫心会主宰、1955）藤野林平（半農半織、1956）秋山兵蔵（農民、1956）伊東愛子（教師、1957）朝倉昭郎（村長、1957）メイラン神父（カトリック宣教師、1957・1958）須田松兵衛（歯科医、1957）徳田磨智子（1957）駄栗毛左京（教師、1957）森田喜一郎（洗濯店主・社会運動、1958）徳 武義（少年院長、1958）五臓円松五郎（江戸期商人、1958）小島善太郎（洋画家、1958・1962）洞水（万芸者・橋本叔父、1959）武藤宗三郎（飼育係、1959）山上三兄弟（社会事業、1959）森田源治（1959）須田章（養鶏家、1960）岡田昇斎（書店等経営・地方文化運動、1960）南南浪（俳人、1960）内山完造（書店経営、1960）鹿島黙太（少年院教官、1960）清水安三（学園経営、1961・1964）村田光彦（地方史家、1961）田中紀子（文筆家、1961）小林浅洲（地方史家、1961）八木重吉（詩人、1961）森田丑五郎（農民、1961）須永漣造（戸長・民権運動、1961）森 一（薬局経営、

辻：庶民による人生の記録の創出

- 1961) 青木貞一(杜寺普請、1961) 乙幡近治(旧友、1962) 井上郷太郎(陶芸家・多摩考古学研究会主宰、1962・1966) 平井ミヨ(1962)、堀江謙一(ヨット冒険家、1962) 黒沢卯一(1963) 塩野半十郎(考古学者・品種改良、1963) 大貫忠三(盆栽芸術家、1963) 塩田真八(民俗学者、1963) 岩田源平(肉屋、1963) 安藤聖二(弁護士、1963) 平井鉄太郎夫妻(学校長・夫人、1963) 杉山光子(校長夫人、1964) 相川重治(米屋、1964) 山崎安雄(新聞記者、1964) 清水成夫(地方史家、1964) 武原はん(地唄舞、1964) 大久保長安(江戸期代官・町普請、1965) 松岡喬一(地方史家、1965) 石坂公歴(民権運動家、1965) 平野友輔(医師・民権運動家、1965) 久保梨花(俳人夫人、1966) 鈴木龍二(信用組合役員・多摩文化研究会主宰、掲載年不明)
- 16 橋本義夫『古代中世 地方史研究法稿―未知は誘惑する―』(地方文化資料49集)、32頁。
- 17 橋本は、大正末年から昭和初期にかけて、青年グループ「自然人社」を主宰し、社会教育活動に取り組んでいる。同グループの回覧誌『自然人』の編集には、『ふだんぎ』との共通性が数多く見られる。
- 18 橋本は、1939年の教育科学研究会八王子支部の設立に参画し、彼が八王子市内で経営していた書店「ようらん社」には、教科書の関係者が出入りしていた。
- 19 橋本鋼二「エスペラントを学べ!」『ふだん記 雲の碑』12号、2003、147頁。
- 20 橋本義夫編『多摩婦人文集1―十周年記念―』八王子文化サロン、1967、89頁。
- 21 関山花子、須田静子、黒沢敏子、平井マリ、橋本譜佐の5名が『ふだんぎ』誌を回覧していた(梶岡男、前掲書、240頁)。のちの「ふだん記」運動で、関山、平井、橋本は「自著本」を出版している。
- 22 色川大吉「ふだん記と自分史の歴史的な意義」(講演記録) ふだん記旭川グループ『橋本義夫とふだん記運動』105頁。
- 23 手刷りの謄写印刷によって機関誌の発行を支えたのは、「ガリ切り」が四宮、印刷が大野聖二、製本が大野弘子、秋間二三子らであった。(大野聖二「ふだんぎのサポーターとして」ふだん記旭川グループ、同前書、2003、101頁。
- 24 ふだん記旭川グループ、同書、86頁。
- 25 「自著本」におけるこの表現の初出は、吉野理作『望郷と旅』(ふだん記本)、1975における橋本の「あとがき」101頁においてであると思われる。
- 26 示されたテーマによる会員の投稿を文集にして「ふだん記本」として出版したもので、定期的に刊行された。テーマは「ふるさと」(68年版)「ともだち」(69年版)「喜怒哀楽」(70年版)「てがみ」(71年版)「ひと」(72年版)などであった。
- 27 橋本鋼二「橋本義夫と私」、ふだん記旭川グループ、前掲書、121頁。
- 28 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー」桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006、248頁。
- 29 橋本義夫「跋」武藤忠敏『続 不器用の戯言』(ふだん記新書)、1975、110頁。
- 30 橋本義夫「あとがき」村内村雄『麦秋旅情 北欧と東欧雑詠』(ふだん記本)、1974
- 31 ふだん記旭川グループ、前掲書、84頁。
- 32 橋本義夫『だれもが書ける文章』講談社、1978、119頁以降。以下、この部分からの引用は鉤括弧のみで示した。
- 33 横山利雄『流々転々』(ふだん記本)、1977、182頁。
- 34 三瓶康子『球子自伝』(ふだん記本)、1975、167頁。
- 35 西村サキ『沖永良部島 附・戦争の爪あと』(ふだん記新書)、1975、80頁。
- 36 橋本「序」西村サキ『郷土沖永良部島』(ふだん記新書)、1976、頁番号なし。
- 37 橋本「ひとこと」西村サキ、前掲書、頁番号なし。
- 38 小金井翼『小ちな八百屋』(ふだん記新書)、1975、63頁。
- 39 色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』中央公論社、1975、251頁、『自分史―その理念と試み―』講談社、1992、27頁。
- 40 金沢志奈『久慈川上流』(ふだん記本)、1971年、8頁。
- 41 色川大吉、前掲書のうち、『自分史―その理念と試み』17頁。
- 42 色川大吉、前掲講演記録、ふだん記旭川グループ、前掲書、28頁。

- 43 織戸建造、前掲書、3頁。
 44 同前書、5頁。
 45 同書、30頁。
 46 同書、54頁。
 47 織戸の引用（出典：服部之総『黒船前後：服部之総随筆集』筑摩書房、1966）による。
 48 橋本義夫『村の母－橋本春子のこと』（文化サロン双書）、1966、7頁。
 49 同前書、同所。
 50 大野聖二、前掲書、103頁。
 51 橋本義夫、前掲書、83頁。
 52 北田耕也『「痴愚天国」幻視行・近藤益雄の生涯』国土社、2003、74頁。

〔別表1〕

「ふだん記本」（1968－1977）の書名および執筆者一覧

NO.	著者名	書名	発行	性	生年	年齢	最終学歴	職歴
5	平井マリ	平井マリ文集	1968	女	1914(T 3)	54	高等女学校	教会職員
10	高野清子	道はるかなれど	1969	女	1934(S 9)	35	短期大学	主婦
11	小泉栄一	多摩の丘かげ－ニュートン以前	1970	男	1917(T 6)	53	小学校高等科	農業
12	川畑秀子	ジョンと思ひ出の浅草	1970	女	1909(M42)	61	小学校	主婦
13	金沢志奈	久慈川上流	1971	女	1905(M38)	66	小学校高等科	主婦
14	田村富之進	私の履歴書	1971	男	1907(M40)	64	小学校高等科	会社員
15	四宮さつき	ながれの中に	1971	女	1923(T12)	48	女子商業	会社員、主婦
18	大野弘子	丘の中の町にて	1972	女	1928(S 3)	44	女子専門学校	主婦
19	岡村保雄	七十五年－わが道草	1973	男	1898(M31)	75	小学校	印刷業、村会議員
20	吉成ウメ	八十歳を越えて－思い出など	1973	女	1888(M21)	85	裁縫学校	主婦
21	橋本譜佐	家の風土記	1974	女	1913(T 2)	61	高等女学校	主婦
22	佐藤ぎん	山は見ていた	1971	女	1920(T 9)	51	女子師範学校	教員、主婦
23	伊東光江	幻の樺太	1972	女	1927(S 2)	45	高等女学校	主婦
24	大野あい志	しらうめ	1972	女	1900(M33)	72	裁縫女学校	主婦
25	尾股惣司	ある鳶職の記録	1972	男	1928(S 3)	44	小学校高等科	鳶職
26	白鳥謹爾	こどもと共に	1972	男	1911(M44)	63	師範学校	小学校長
27	設楽政治	高尾山麓夜話	1973	男	1907(M40)	66	農林学校	会社役員
28	細川キクエ	どさんこ－小樽を故郷として	1973	女	1914(T 3)	59	小学校高等科	主婦
29	金井郁夫	観察・実験・思考	1973	男	1926(T15)	47	青年学校	教員
32	矢島志恵子	ハイツの日々	1972	女	1928(S 3)	44	高等女学校	主婦
33	川畑秀子	ジョンの日記	1973	女	1909(M42)	64	小学校	主婦
34	篠宮みどり	思い出の大陸－ふるさと東京	1973	女	1917(T 6)	56	高等女学校	会社員、主婦
35	関 文月	北村透谷（遺稿集）	1973	男	1912(T 2)	故人	大学	学生
36	吉野理作	望郷と旅	1975	男	1900(M33)	75	蚕糸学校	技師、農協職員

辻：庶民による人生の記録の創出

37	村内村雄	麦秋旅情―北欧と東欧	1974	男	1912(T 2)	62	商業学校	会社社長
38	関 文月	詩想と詩（遺稿集）	1973	男	1912(T 2)	故人	大学	学生
39	秦 英一	ある小市民の記録	1973	男	1927(S 2)	46	小学校高等科	会社員
40	関山花子	森と町の記録	1974	女	1910(M43)	64	高等女学校	主婦
43	三瓶康子	球子自伝	1975	女	1902(M35)	73	養成校	看護婦
44	坂内 亨	冬の秩父札所	1975	男	1923(T12)	52	不明	会社員
45	瀬沼和重	高尾一山と麓の地誌	1976	男	1927(S 2)	49	高等小学校	消防士
46	妹尾恵美子	このはるかなるもの	1976	女	1914(T 3)	62	高等師範学校	教員、主婦
47	横山利雄	流々転々	1977	男	1909(M42)	68	小学校高等科	運転手、工員他
48	茂木栄三郎	関東のド真中：ある郷土史	1977	男	1913(T 2)	64	農業学校	会社経営他
49	香川 節	多摩の空と大地に	1977	男	1924(T13)	53	大学	教員
50	四宮さつき	十年―ふだん記とともに	1976	女	1923(T12)	52	女子商業	会社員、主婦
51	角田賤夫	太平洋戦争の体験（遺稿集）	1977	男	1913(T 2)	故人	小学校高等科	地方公務員

注：一覧の「番号」は「ふだん記本」の刊行番号、「年齢」は出版時の年齢による。また、著者名と書名は「ふだん記本」巻末の刊行一覧による。

〔別表2〕

「ふだん記新書」（1974-1977）書名および執筆者一覧

NO.	著者名	書名	発行	性	生年	年齢	最終学歴	職歴
2	山本秀順	道とあしあと	1974	男	1911(M44)	63	専門学校	僧侶
3	海端俊子	海は私の絵本（詩集）	1974	女	1937(S12)	37	中学校	主婦
4	大久保哉子	従軍看護婦の記録	1974	女	1917(T 6)	57	高等女学校	養護教諭・主婦
5	足立原美枝子	相州八菅山	1974	女	1912(M45)	62	大学	主婦
6	村田きみ	わたしの人生街道	1974	女	1915(T 4)	59	高等小学校	主婦・会社員
7	茅原退二郎	石を祭る歌（詩集）	1975	男	1898(M31)	77	大学	大学教員
8	笠間文子	蜷の目	1974	女	1910(M43)	64	専門学校	教員・主婦
9	馬淵登志恵	孤独な舞踏	1974	女	1928(S17)	46	高等小学校	会社員・自営
11	松本きのえ	ちぎれ雲	1975	女	1906(M39)	69	養成所	看護婦・主婦
12	沢田鶴吉	寺田の百姓	1975	男	不明		不明	農業
13	武藤忠敏	続・不器用の戯言（エッセー）	1977	男	1910(M43)	67	大学	会社役員
14	奥住喜重	回想の太田秀穂先生	1975	男	1923(T12)	52	大学	高校教諭
15	豊田タカ	江戸っ子ばあちゃん（童話）	1975	女	1918(T 7)	57	高等小学校	主婦
16	清水 豊	身辺今昔	1975	男	1899(M32)	76	高等小学校	町会議員他
17	牧口啓次郎	二つの故郷―小樽と明治	1975	男	1893(M26)	82	講習所	施設職員他
18	西村サキ	沖之永良部島	1975	女	1918(T 7)	57	高等小学校	農業・主婦
19	榎本秋男	一日本人の信仰	1975	男	1915(T 4)	60	青年学校	公務員
20	吉沢永一(妹尾編)	吉沢永一詩集（遺稿集）	1975	男	1912(T元)	故人	大学	会社員
21	法水きみゑ	バス運転手の家	1975	女	1932(S 7)	43	不明	主婦
22	飯田 清	社会の一隅	1975	男	1909(M42)	66	大学	職業相談員他

23	下沢菊江	いらくさの道	1976	女	1908(M41)	68	大学	教員・主婦
24	豊田タカ	居候日記	1976	女	1918(T 7)	58	高等小学校	主婦
26	佐藤泰弘	木屋四十年	1976	男	1915(T 4)	61	実業学校	木材業
27	柳川ぎん	農婦のペン	1976	女	1910(M43)	66	高等小学校	農業・主婦
28	篠宮みどり	チッチと家族たち	1976	女	1917(T 6)	59	高等女学校	会社員・主婦
29	水野芳光	東白川郡鮫川村に生まれて	1976	男	1899(M32)	77	養成所	運転手他
30	足立原美枝子	八菅山の女たち	1976	女	1912(M45)	64	大学	主婦
33	岡村保雄	東京貧乏物語	1976	男	1898(M31)	78	高等小学校	印刷業・村議
34	茅原退二郎	詩集『通過儀礼』	1976	男	1898(M31)	78	大学	大学教員
36	住野隆子	真実を求めて	1976	女	1907(M40)	69	専門学校	主婦
37	中井 實	孫のデッサン	1976	男	1914(T 3)	62	大学	会社員
39	松本きのえ	看護婦昔と今	1976	女	1906(M39)	70	養成所	看護婦・主婦
40	織戸健造	石ころの履歴書	1976	男	1905(M38)	71	実業学校	洋服関係商他
42	小金井 巽	小ちゃん八百屋	1975	男	1937(S12)	38	中学校	八百屋
43	朝井絹江	染職人	1975	女	1937(S 7)	38	高等女学校	染職人
44	尾股協子	麦の穂	1975	女	1940(S15)	35	中学校	会社員・主婦
45	前川宮子	伊予北條にて	1976	女	1942(S17)	48	高等学校	主婦・保母
46	馬淵登志恵	右手が作らせ左手で書いた詩	1976	女	1928(S 3)	48	高等小学校	自営
47	大塚つまの	草の実	1976	女	1886(M29)	90	師範学校	教員・主婦
48	西川千代子	みのまわり	1976	女	1920(T 9)	56	青年学校	主婦
51	江草うめ代	春の日秋の日	1977	女	1921(T10)	56	養成所	看護婦・主婦
52	西村サキ	郷土沖之永良部島	1976	女	1918(T 7)	58	高等小学校	農業・主婦
53	清水ちよ	ハヶ岳山麓の村	1976	女	1904(M37)	72	高等小学校	農業・主婦
54	武藤忠敏	続々・不器用の戯言(エッセー)	1977	男	1910(M43)	67	大学	会社役員
55	高橋俊男	職場遍路	1977	男	1913(T 2)	64	実業学校	会社員
56	下沢菊江	をちこち	1977	女	1908(M41)	69	大学	教員・主婦
57	奥住喜重	てまりうた	1977	男	1923(T12)	54	大学	高校教諭
58	桑川延子	農村にありて	1977	女	1924(T13)	53	小学校高等科	農業・主婦

注：一覧の「番号」は「新書」の刊行番号、「年齢」は出版時の年齢による。また、著者名と書名は「新書」巻末の刊行一覧による。